

大学生に技術士資格を啓発する

Educate University Students for Professional Engineer

1 メディアが若者の関心を高める

気象予報士という資格を知らない人はほとんどいない。毎日のようにテレビの天気予報コーナーで見かけるし、視聴者から人気を博しているアイドル予報士もいる。しかし、この資格は単に天気解説をするだけなら必要なく、気象庁などが発表した予報を読むのはアナウンサーでも一向に構わない。では、どうしてこの資格がこれほどメディア業界に根付いたのか。それは制度が始まった当時、話題性の高さから受験者が殺到し、その結果、合格率は数パーセントと超難関になったことで、さらなる話題を呼びそこにメディアも相乗りしたことが大きかったのではないだろうか。

メディアといえば、テレビドラマでトレンド俳優が演じた職業が一夜にして有名になったということも数多く、その影響力は絶大なるものがある。しかし、技術士はその恩恵にあずかるという点で不利かもしれない。業務内容が穏やかなイメージで若者をターゲットにした脚本化は難しそうだし、渋いアラフォー俳優が演じれば、視聴者層まで落ちてしまうだろう。また、ドラマに限らずニュースなどの報道で技術士を見かけたことなど筆者の記憶にないし、漫才などのお笑い番組で取り上げられることもまずない。つまり、若者に対して最も訴求力の高いメディアを通じて技術士制度を認知してもらうことは大変困難な状況といわざるを得ない。

一方、最近の若者は自分が興味のあるものに対しては深く追求する傾向が見られ、オタクとよばれる人たちの行動力に感心することも少なくない。それが研究などに向けば偉業を成し遂げるのかもしれないが、情報過剰の現代は欲しいものに対する答えをいとも簡単に与えてくれ、探求することの充実感を享受できない環境にあるようだ。当然のことながら、興味のないことに対しては全く知ろうともしないのが今時の若者である。

2 慢心したスプリンターは聞く耳持たず

熾烈な受験戦争から解放された大学生は、ようやくゴールにたどり着いたと勘違いし、これまで我慢してきた欲求を満たすため、学業はほどほどにサークルやコンパ、アルバイトに熱中する。そのなかで社会性を身につけて、より人間力を高めて卒業するものも多いが、落ちこぼれて卒業を遅らせる羽目になるものもいる。昼夜逆転している学生にとって講義時間は睡眠確保の絶好のタイミングかもしれない、そんな彼らに将来だの自己実現だの訴えてもなかなか耳に届かない。

多くの学生たちは大学のブランド力というものに惑わされ、偏差値という物差しでそのブランドを誇示する。したがって、高ブランドの大学を卒業するときには、社会が華々しく出迎えてくれると信じており、現実の就職活動でそのギャップに直面し仰天する。多くの企業で求められているのは、入試という一発勝負に勝ち抜くスプリンター的な人材ではないことに気付かねばなるまい。大学生生活を享楽して過ごし、完全燃焼した学生は、まるで引退後のスプリンターであり、就職レースの参加資格すら与えられない。

第一種放射線取扱主任者という資格がある。放射線障害防止法が適用される事業所の必置資格であり、合格率は二十数パーセントと難関である。筆者が所属する専攻学科では、卒業までにこの国家試験に合格することを推奨している。将来それがメシのたねになるかどうかはわからない。専攻学科では診療放射線技師を養成しており、両資格の接点はあるが、両方持っていないと困るわけではない。こんなとき、可能性を広げるタイプの学生と必要最低限のことしかやらない学生のコントラストが明瞭となる。資格取得には勉強という労力だけでなく多くの出費をとめない、興味のあること以外は何も出費しない傾向のある学生を啓発することは難しい。実際、受験を決心した学生でさえ自

分の行動を正当化するために資格取得の必要性の有無を納得するまで聞いてくる。それに対する筆者の返答は概ね精神論に近くなってしまふ。

「仕事は大きく主体性のあるものとなないものにわかる。主体性のないものはいずれロボットや機械に置き換わっていく。そして、高い能力を有する人間はより主体性のある仕事が任される。目の前にある困難に勝負を挑むか逃亡するかは仕事に対する姿勢となって表れる」

3 学生を突き動かすには

筆者は、技術士を最後に専攻学科に関連する資格はすべて取得した。その数は十近くにのぼり、これまで費やした時間と金銭は莫大なものになる。これらの資格は自身の肩書きとなっているのだが、もう一つ重要な取得目的がある。それは、学生に資格取得を推奨するときに有資格者からの助言として聞いてもらうためである。もちろん多くの資格を取得してもペーパードライバーのように持っているだけなら、マニアと評されてオタクの仲間入りとなる。そこで、取得した資格に関する自己研鑽、すなわち職能団体等での社会活動を通じた情報収集（CPD）が大いに役立つ。学生はペーパー資格者のということには突き動かされないのだ。その点で彼らの貪欲さは合理的ともいえる。

大学教員は研究者なので博士号さえ持っていればよいといわれる。たしかに職務は研究と教育なので、資格取得に費やす時間を学会発表や論文執筆にあてるほうが本来の姿かもしれない。しかし、大学全入時代となったいま、教員は学生の生涯を決める役割を担わされつつあり、景気低迷する社会は即戦力人材の輩出を大学に期待している。オープンキャンパス開催や入試制度の多様化を見ても、保護者と社会の要求に対応するため、大学は四半世紀前とは別次元といえるほど変わらざるを得なかったことが窺える。研究・教育機関であるなどという一辺倒な考え方で乗り切っていける時代ではない。このような変化が長期的に見て正しかったかどうかはいずれ検証しなければならないと思うが、「いまどきの若いモンは云々」という常套句はいつの時代も存在し、互いに歩み寄る姿勢が必要なのかもしれない。

4 啓発は刺激を与えることから

前述したとおり筆者の専攻学科では、診療放射線技師を養成しており、多くの卒業生が同業者となる。同窓会を催しても仕事の話で盛り上がるのが特徴だ。医療系大学に進学した学生の多くは、卒業時に受ける基礎資格の国家試験に合格すれば、大学に来た目的のほとんどは達成できると考えており、講義の重要度も国家試験に出題されるか否かで功利的に判断する。

そんな学生を前に技術士資格に関する啓発を試みた。技術士は医療に必要とされる資格ではなく、おそらく取得による収入増は見込めないが、技術者であるからには技術士を目指してほしいという気持ちが筆者にはある。

「医療技術者は高い技能が要求され、その質を担保するために生涯にわたって自己研鑽を継続していかなければならない。一方、それを評価する仕組みがないとやる気につながらないため、多くの医療関連団体では専門認定資格という制度を設けている。しかし、認定を受けなければ業務が制限されるというわけではなく、単なる自己満足だと皮肉られるときもある。要するに人は誰も他者から評価されたいという承認欲求があり、認定資格はそれに利用されているに過ぎない。それならば、技術士になって国家が認める高級技術者の仲間入りをするというのはどうだろう。あらゆる技術分野において、高い評価を受けている技術士は、厚生労働大臣が定める『高度の専門的知識等の基準』の資格の一つとして明記されており、社会的認知度もある。これまで医療技術者は、自分の技術力を客観的に示す尺度を持っていなかったもので、次世代のみなさんには技術士資格を大いに活用してもらいたい」

果たして大学生を啓発できただろうか。

川辺 睦 (かわべ あつし)

技術士（原子力・放射線部門）

岡山大学大学院保健学研究科

放射線技術科学分野 助教

博士（保健学）

e-mail : akawabe@md.okayama-u.ac.jp

